日本保育学会公式シンボルマーク

日本保育学会会報

2009年9月1日　発行
編集・発行　日本保育学会
編集責任者　戸田雅美

JAPAN SOCIETY of RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B,Rロジェ T-1
Tel 03-3234-1410 Fax 03-3234-1414
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsrec/index.html

●第145号●

新会長挨拶

秋田喜代美

2009年5月15日開催の新理事会で、日本保育学会会長に選出され、第7代会長を拝命することになった。

会則第2条にある「保育学界の発達を期し、保育の研究に関係ある個人及び団体の連絡をはかり、もって保育事業の進歩に貢献する事を目的とする」という出発点につねに立ち戻り、小川博久前会長が築かれた方向性を受け継ぎ、柴崎正行、小川清実両新副会長と共に、転換期にある本学会の将来を見据えたグランドデザインをつくり、任務に取り組んでいきたい。

今期取り組むべき重要課題の一つは、一般社団法人化への移行作業である。本学会は会員数が4500名を越える大組織となっている。学会の果たす社会的役割を明確にし、学術研究組織として外部からも公的に認知されるためには、一般社団法人化は学会運営上不可欠である。2010年4月1日よりの一般社団法人化をめざし、本年度後半に作業を進めていく予定である。

日本学術会議は、「これからの学術団体のあり方に関する調査報告」(2009.5)の中で、欧米諸学会では学会の社会的貢献活動が活発であること、また学会事務局職員の専門性が重視されている点等を指摘し日本の学協会のこれからへの提言をしている。本学会事務局職員の方々は学会運営のために専門的見識を有した業務を日々行ってくださっている。この専門性に対応した事務局雇用体制整備を一層進めたい。

専門的知識の高度複合化、情報化、グローバル化に対応していくことが現在どの分野でも求められている。これらの課題に、委員会数の増加ではなく、既設委員会の活動の質的充実により対応し、一般会員が本学会とのつながりをより深く感じられる取り組みや社会的貢献活動を含む、学会としての活動の一層の充実推進をはかっていくことに取り組みたい。

その第一に、現在の社会的ニーズに応える保育研究活動への学会としての取り組みである。今期には、保育臨床相談システム検討委員会で、事例をもとに報告書を発刊していくことが予定されている。また倫理綱領ガイドブック編集委員会でも、保育研究倫理について会員のみならず社会に対して普及啓発するために、事例を含んだガイドブック出版を予定している。課題研究委員会、保育政策検討・研修企画委員会でも保育制度改革等の政策課題に対し、学術データや知見にもとづく提言等を行っていく取り組みをしていく予定である。豊かな実践事例の交流により、保育学研究の特色を生かした専門的高度化に取り組みたい。

第二には、会員による研究発表と交流の充実のために、大会運営のあり方の再検討、保育学研究の審査体制のあり方の再検討を行う予定である。これらは前期からの継続課題である。一般社団法人化を契機に大会運営体制を組織検討委員会で見直していく予定である。また保育学研究について、査読結果フィードバックのあり方に関して意見も寄せられている。常任編集委員人数の増員等、改善を徐々に図ってきているが、会員投稿者の期待に応え研究の質の向上を図る体制へのさらなる改善が課題となる。

第三にはグローバル化に対応し、東アジア諸国、特に韓国を中心にし、中国や台湾との学術研究交流が前期より国際交流委員会の尽力で進められてきた。この交流をさらに継続的に、また会員が積極的に行えるための持続可能な体制づくりを進めたい。

そして会報やHPの一層の充実を広報委員会で図りたい。大きな組織だからこその利点を生かし、様々な地域に多様な専門性を持つ会員がいるという知のリソースを活かした情報発信、交流ネットワーク作りが課題である。これらは、会員一人ひとりの責任ある参加と協力があって初めて可能となる。「保育学会会員でよかった」と誇りをもち、保育への希望を創りだす「私たちの学会」となるよう、微力ながら会員の皆様と共に取り組むつもりである。

●特 集● 第62回大会レポート（千葉大学）

日本保育学会第62回大会は、榎沢準備委員長のもと、千葉地区の会員の力によって大変活発なものとなった。大会は、発表者は、研究を重ね、この機会に他の会員と議論すべく準備をして臨み、聞く者も、日ごろの自身の研究や実践と重ねて考え、議論する場である。今回は、大会レポートを特集とした。

第62回大会を終了して

第62回大会準備委員長　榎沢　良彦

第62回大会は、去る5月16日・17日に千葉大学を主会場として開催されました。お陰様で2600名を越える参加者があり、盛況の内に終了することができ、準備委員長として安堵しているところです。慌ただしさから解放され、落ち着いたところで、今大会を振り返り、会員の皆様へのお願いと課題を述べさせていただきます。

まず、お願いしたいことです。準備委員長としてこれまでを振り返ってみますと、やはり、本学会の大会を開催することは大変なことであると実感します。現在、本学会は会員数が4500名に達しています。組織が大きくなればなるほど、会員の要望も多様化し、その数も増えます。個々の要望にきめ細かに応えることは、業務を煩雑にし、準備委員会の負担を重くするだけではなく、ミスも発生しやすくします。ミスが発生すれば、それへの対応に追われることになり、さらに業務が増大します。準備業務の中でも、特にプログラムの編成と論文集の作成は時間と労力と注意力を必要とします。今大会では、700件を超える発表がありました。複数研究発表者をチェックしつつ、これだけの数の発表をグループ化し、2日間に収めることは心身ともに負担の大きな作業です。どうしてもミスは避けようがありません。今回も、プログラム作成に関わり、何人かの会員にご迷惑をお掛けしてしまいました。

準備委員会の負担を軽減し、ミスの発生を極力抑えるためには、会員の皆様が大会への参加及び発表のルールを熟知し、それに則って行動する必要があります。今大会に向けては、発表に関わるお願いを『会報』第141号（2008年5月1日）に掲載してもらいましたし、第1号通信には発表のルールなどを明記しました。それでも、残念ながらルールを忘れているケースがありました。会員の皆様自身が多忙である故に、ルールを失念することもあるでしょう。また、個々の事情からルール通りに行かないということもあるでしょう。しかしながら、準備委員会がルールに則していないケースに対応するために多くの時間と労力を費やしたことも事実です。大会が、参加者にとって満足のいくものとなるためには、準備が順調に進むことが肝要です。会員の皆様には、サービスを受ける者として大会に参加するのではなく、「みんなで大会を支える」という意識に立って、発表を申し込み、大会に臨んでいただきたいと切に願います。

次に課題です。本大会での発表は700件を超えました。発表件数の多さは会員の研究活動の活発さを表していると考えられますが、必ずしも研究の質の向上に結び付くわけではありません。また、実践の質の向上に結び付くわけでもありません。むしろ、発表件数の多さは、「大会は研究としての深まりがなくても、とりあえず発表できる場である」との認識の表れとも考えられます。大会の成功と充実は、研究の内容をめぐり十分に議論することによるでしょう。そのような認識に立ち、今後、会員の皆様が深まった研究をより多く発表されることを期待したいです。

大会が研究の質の向上につながるためには、「大会は厳しく研究の質が吟味される場である」という認識が生まれることが必要です。したがって、分科会のもち方が重要であると言えます。学会として、参加者が互いに問題点や課題を明確にし、核心に触れる議論をしていくような分科会のあり方を検討する必要があるでしょう。そして、そのような雰囲気が醸成されることで、研究の質が向上し、かつ発表件数が絞られるのではないでしょうか。

大会準備委員会企画シンポジウムV
保育における遊びの豊かさとは何か
―遊びにおける環境を考える―

菊地　恵

このシンポジウムのテーマである、保育における遊びの豊かさとは何かという点に、多くの参加者が関心を持っていた。話題提供者からと、指定討論者の河邉氏から出たいくつかの視点を私なりに紹介したい。

大和郷幼稚園の向山陽子氏からは、園内外の環境構

成についてのエピソードを中心に話題提供があった。保育環境を、遊びを通して作り出すのは保育者と子どもである。その積み重ねの中に遊びの豊かさが見えてくるのではないだろうか、という話であった。

岸井慶子氏からは、VTRを通しての子どもの遊びの姿から、遊びの豊かさと環境とは、遊びの中で“真剣さ”が引き出される環境であり、“試し”が許容される環境（時間、雰囲気、場）が重要であることや、場や遊び方を創りだし、変えられる環境に、豊かさが含まれてくるということが述べられた。VTRでは、男児が綱渡りをする姿から、その中での他児との会話や、達成したときに担任に向かって出来た喜びを叫ぶ姿など、映像からその時の子どもの真剣さ、チャレンジしている緊張感、渡りきった時の喜びが伝わってきた。

加用文男氏からは、長年交流のある園での子どもとのかかわりの事例を通して、「遊びは学び」という概念への疑問が投げかけられた。学びをどうとらえるか、ということについては諸見解があるだろうが、加用氏は、乳幼児期における遊びの中では“感情の耕し”の観点を重要視したいという見解であった。

これら三者の話題提供をうけ、河邊貴子氏が、そもそも保育における遊びの意味を考えると、“保育における遊び”には必要条件として、①友だちがいること②メンバーが特定多数であること③時間と空間が限定されていること④保育者がいるということ、をあげていた。保育の日常性の中で、保育者はその生活を築いていく責任がある。そのためには5つの領域から読み取りながら、総合的に育っていく過程を把握することが大切であり、それは計画的でなくてはならない。またそれが、保育における遊びの豊かさを考えるにあたって忘れられないポイントである。つまり保育の内容の方向性によっても遊びの豊かさが方向づけられるということであった。

会の終了時間となっても、会場からの質問が飛び交い、話題提供者、河邊氏のそれに対する応答の深まりに、もっと聞きたい、といった気持ちが高まった。このシンポジウムを通して、“保育における遊びの豊かさ”について、私としては“保育における”という点について改めて考えることが多く、“保育における”子どもの姿を細やかに見つめ、その遊びの豊かさを考えていきたい、と感じた。

●*Profile*
菊地　恵（きくち　めぐみ）
聖園学園短期大学保育科助教
専門は保育学・幼児教育学。保育内容の中でも、主として「環境」を中心に、「人間関係」などを研究しています。この2年間は、場所や空間と人との関わりについて研究をすすめてきました。

特別講演Ⅰ
宮崎アニメはなぜおもしろいのか?

上田　敏丈

特別講演Ⅰは「宮崎駿のアニメはなぜおもしろいのか?」についてであった。宮崎駿のアニメーションはテレビで放送すれば、視聴率が軒並み20%を超えるという。多くの人々に愛されている宮崎アニメの魅力とは一体なのだろうか。会場に集まった人々の思いであっただろう。

まず、特別講演として游珮芸氏より、台湾の児童文化の視座からみた宮崎駿のアニメについて報告された。

台湾でも宮崎駿のアニメは非常に好まれており、アンケート調査の結果では、小学生の約70%が好きと答え、中学生以上に至っては、90%以上が好きであると答えていた。好きな作品の一位は「となりのトトロ」であり（日本と同じ）、二位以下では小学生が「ハウルの動く城」、中学生以上が「千と千尋の神隠し」をあげていた。好きなキャラクターでは、「トトロ」「ハウル」「ハク」と魔法を使えるファンタジー的要素を持っているものが好まれているという結果であった。また、台湾ではしばらく日本のアニメが規制されていたが、1992年に緩和されて以後、多くの日本アニメが放映されているという。このような日本のアニメ文化を見て育った台湾の学生への聞き取りでも、宮崎アニメは高く評価されており、宮崎駿のアニメのキャラクターの造形の深さやストーリーの多義性、メッセージ性などが国境を越えて受け入れられているのではないか、という報告があった。

これを受けて、浅野俊和氏との対談となる。二人及びフロアからの意見も含めて、以下のようなやりとりが行われた。

①監督・宮崎駿の個性…彼自身が三歳まではテレビを見せるべきではないと述べている一方で、子ども向けのアニメを制作している。このような矛盾を抱えているからこそ、その作品に多義性が表れるのではないか。つまり一人の作家の生き様として捉えていく視点も必要であろう。

②文化比較の視点…台湾ではあまりオリジナルのアニメはつくられていない。児童文化として見ると、文化侵略ということも考えられるが、一方で子どもにとってみると、「made in ～」はあまり関係なく、おもしろいものが受け入れられる。また、世代間による受け取られ方の違いもある。

③媒介としての役割…宮崎アニメは、親子で安心して見られるため、家族の絆をつなぐ媒介としての役割

がある。

以上のように、宮崎アニメを中心に多岐にわたるディスカッションがなされていた。

宮崎アニメはどのような意味を持っているのか。そもそも、アニメに限らず多様なメディアが形成する文化は、自分にとって切り離せない関係にあった。これらの文化が自らにとってどのような意味があるのか、いや、子どもにとってもまた、どのような意味を持つのだろうか。多様なメディアが現れ、表現が可能になった今こそ、改めて、メディアと子どもとの関係について、その意味を考えさせられたシンポジウムであった。

●*Profile*
上田敏丈（うえだ　はるとも）
中国学園大学子ども学部子ども学科講師
専門は幼児教育学、特に保育者論を中心にしている。現在は、保育者の幼児に対する援助についての研究を行っている。

保育思想・保育理論・保育史に参加して

布村　志保

いつの時代でも保育者は「子どもと共に生き、本質に向き合い」ながら歩んでいます。その取り組みの積み重ね、つらなりの上に今があることを、改めて意識することのできる分科会が私の参加させて頂いた「保育思想・保育理論・保育史」部会であると思います。

さて、「この分科会にキーワードをつけましょう」と言われたら、私は「継続」と答えたいと思います。

まず、継続的な発表が多いという点からです。発表者がそれぞれの課題に丁寧な検討を続けながら、新たな視座や研究成果を提示する意欲的な発表がなされています。

今年度の発表においても、保育に携わる者ならば知らぬ者はない東京女子師範学校附属幼稚園の保育場面図や倉橋惣三の教育論について、新たな知見を得ることができました。また、よりよい保育を目指して工夫を重ねる様子や苦悩をも浮かび上がらせながら、その根底にある子どもへのまなざしのあたたかさを感じる発表もありました。

また、当時は適わなかった主張も言い続けることが、その後の動向を変えることにつながったという説明がなされた発表がありました。当時の保育関係者があきらめずに主張し続けた熱い思いも「継続」に含めたいと思います。

次に、発表者だけでなく、分科会に参加する側も継続して聞いている会員が比較的多いという点からです。今回は40名以上の方が集まっての討議となり、前年の大会よりも参加された方が増えたように思います。

継続して聞いてこられた会員からの鋭い質問と、新たに参加された会員からの思いがけない、しかし本質的な質問が発表者に投げかけられました。どの研究分野でも自明のことではありますが、いずれの発表も第一次資料を提示して検討しておりますので、特に資料の読み取りについて、当時の実践内容について等の質疑が多くなされました。発表者にとって今後の研究を深めるばかりでなく、分科会そのものに厚みを持たせたのではないかと思っています。

どの研究分野においても先行研究への言及や緻密な証左を自覚していたいと思います。

一つの分科会といえども、研究テーマの多様さはいうまでもありません。各時代の保育者たちの豊かな取り組みや保育界の願いを浮かび上がらせた発表は、それぞれが最新の研究成果であるとともに、現代の課題を読み解く鍵を提示していたように思います。

余談になりますが、私ばかりでなく神戸から参加した会員にとって、今回は忘れられない大会となりそうです。大会初日、神戸で新型インフルエンザの感染者が確認され、各学校は対応に追われることとなりました。

広い会場内で勤務校の先生に出会えた時のこと、発表した分科会まで連絡を伝えに来てくださった先生ご自身が、参加する分科会へと足早に向かわれる姿、これから大会に参加するたびにそんな光景を思い出すでしょう。

●*Profile*
布村　志保（ぬのむら　しほ）
頌栄短期大学保育科講師。
日本教育史。保育学。
この数年、野村芳兵衛の取り組みを研究の軸とし、彼の「自然あそび」や「仲間づくり」等について検討しています。並行して絵本・児童文学への学びを深めております。

保育内容総論・遊びに参加して

青山　昌子

この分科会では「保育における遊びとは」という問いを、発表者の方々がそれぞれ独自の視点から捉えようとしていたように思う。立ち見が出るほど盛況となった背景には、それだけこの問いが本質的なものであり、多くの実践者や研究者にとっても興味深いものだったからに違いない。

一組を除いて、具体的な保育場面の観察や記録から保育における遊びを理解しようとする報告がなされた。粕谷氏は幼児にとっての砂遊びの魅力を説明しようとされていた。藤塚氏は友達とのかかわりながら遊びを共有するための条件や要因を年齢別に検討されていた。田代氏は遊びの目標を友達と共有していく姿を捉えることで、遊びにおける協同性について考察されていた。安藤氏は遊びの“意味”と保育者の援助について検討されていた。横井氏は「遊隙」あるいは「企て」といった言葉を使って、現象学的な視点から遊びを説明しようとされていた。そして、松崎氏らの研究では遊びだけでなく保育全般に対する意識や期待に関して、保育者と保護者ではずれが生じていることが報告された。

これだけさまざまなアプローチから保育における遊びを捉えようとしているのは、このことが保育者の援助や環境構成の工夫を行うための根拠となるからであろう。そして、すべての発表が終わった後、議論の中で話題になったのは遊びの“意味”という言葉自体に対する問いである。普段実践者として保育に携わっている私自身、遊びの“意味”という言葉を安易に使いすぎてはいないだろうか、と気付かされた。遊びの盛り上がりの程度なのか、子どもの興味や楽しみを指しているのか、あるいは大人側が持つその遊びに対する評価なのか…。遊びのどういった面に着目しているのかを自覚しておかないと、いつも同じ視点からしか遊びを捉えられなくなってしまうだろう。また、「保育における遊び」を対象としていることから、その遊びをしている子どもからの視点と、指導計画やねらいをもってかかわろうとする保育者の視点の両方の視点から捉えていく必要があることも、これらの議論を聞きながらずっと考え続けていた。松崎氏らの研究からは、それに加えて保護者の立場からの意見があることにも気付き、保護者との連携や相互理解のためにどのような努力ができるのかを考えさせられた。

日々の生活に追われていると、こういった本質的な問いを考える機会はめったにない。発表者の方々の話を聞くことで、私は自分自身がどのように遊びを捉えようとしているのか、それを保護者に伝える努力をしているだろうかと、自分自身の保育を振り返るよいきっかけとなった。発表者の方から多くの刺激をいただいただけでなく、発言から発言へとつながって議論がどんどん盛り上がっていった全体討議からも、多くのことを学ぶことができ、とても有意義な時間となった。

●*Profile*
青山　昌子（あおやま　まさこ）
静岡大学教育学部附属幼稚園
保育実践における環境構成の難しさや面白さが、わかるようになってきました。子どもにとって生活しやすい環境とはどんなものか、あるいは保育者の意図やねらいを環境にこめて伝えることができるのか、ということを考えています。